

すべての子どもが共に育ち合う 「インクルーシブ保育」における保育者の専門性に関する研究

人間科学部
子ども教育学科
助手
沖本 悠生



研究シーズの紹介

近年、特別な配慮を必要とする子どもが増加する中（文科省、2017）、その保育に関して、「障害の有無を前提とせず、すべての子ども一人一人のニーズに応じて保育するインクルーシブ保育」の重要性が言われている。インクルーシブ保育では、その子に応じた「個」への援助が必要である一方、「集団」への援助も必要であり、一人一人のニーズに合わせた保育が求められる。そこには、保育者の援助の在り方という専門性が重

要だが、保育の現場では保育者が戸惑いや不安を感じているという現状が報告されている。

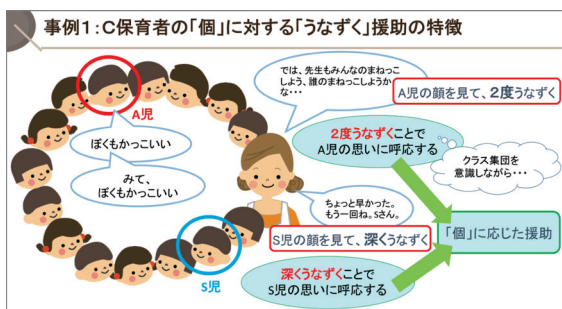
そこで、特別な配慮を必要とする子どもが在籍するクラスでの「保育者の援助」に着目し、保育者が「集団」と「個」に対してどのように具体的な援助を行っているか検討し、インクルーシブ保育で求められる保育者の専門性を明らかにしていくことを目的として研究を行っている。



保育者のさり気ない援助

- 「保育者によって意識された、子どもにとって特別感がない、さり気ない援助」であることがポイントのひとつである。
- それが、どの子どもも保育場面に参加しやすくなる援助となる。

出欠確認や1日の予定などを伝える「朝のお集り場面」における保育者の「うなずく」援助のバリエーション



自分の気持ちを表現した子どもに対して「2度うなずく」「深くうなずく」ことで、子どもの思いに応える。

A児：特別な配慮が必要な子ども
S児：日頃、特別な配慮が必要だと思われていない子ども



「子どもたちを見渡しながらうなずく」ことで、一人一人の子どもを意識しながらも集団に応じた援助を行う。

特別な配慮の要不要にかかわらず、その日その時の子どもの様子によって、「うなずく」頻度や様子が異なる

一人一人のニーズに応じることにつながる

期待される活用シーン

●特別な配慮が必要な子どもが在籍するクラスの担任保育者の悩み
「インクルーシブ保育はどのように行えばよいのか。」



・「子ども一人ひとりが異なる」ことを理解し、気になる行動や障害だけで子どもを理解しようとする。
・個別具体的に子どもを見る。

・個別具体的に子どもを見ることで、その子どもの思いに寄り添い、ニーズに応じることができる援助になる。

その日その時のA児の様子はどうか？

●特別な配慮が必要な子どもが在籍するクラスの担任保育者の悩み
「A児がお集り場面に参加できない。どうしたらよいか。」



・微細な保育者の援助を意識する。「うなずき」「指差し」等
・声かけ等の直接的な援助だけでなく、子どもを取り巻く場の環境・雰囲気を整える援助を柔軟に行う。

・例えば「うなずく」援助を意識することが、A児にとって自分を見てくれているという安心感につながる。
・お集り場面で円形・一列に座る等、A児や子ども達の様子に応じて柔軟に環境構成を変化することで参加しやすくなる。

その他の研究テーマ

インクルーシブ保育における保育者の葛藤と成長をめぐる 太田俊己・沖本悠生・金子功一・鶴巻直子・真鍋健
関東学院大学人間環境学会紀要第32号 p.41-57 2019年
乳幼児教育における特別支援教育の推進—特別支援教育からインクルーシブ教育システムの構築へ向け—
阿部 敬信・木船 幸孝・阪木 啓二・沖本 悠生・井上 佳奈 九州産業大学人間科学部紀要「人間科学」1巻 p.38-48 2019年